

琉球大学学術リポジトリ

ベニョフスキ伯爵の『回想録と旅行記』の国際的比較：東欧人・日本人・琉球人たちの叙述をとおして

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2019-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: グレジユク, シモン, Gredzuk, Szymon メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44331

目次 (注記：本要約部分に該当する部分を下線で示す。)

1. 序論
 - 1.1. ベニョフスキの略歴
 - 1.2. 研究設定
 - 1.3. 研究方法論
 - 1.4. 本論文の概要
 - 1.5. 注記
 - 1.6. 序論：図集
2. 先行研究
 - 2.1. 欧米
 - 2.2. 日本
 - 2.3. まとめ
3. 『回想記』における日本
 - 3.1. 『回想記』の叙述
 - 3.2. リュミンの叙述
 - 3.3. ステパノフの叙述
 - 3.4. 新七の叙述 『富永文蔵の報告』
 - 3.5. 史料の比較調査・解説
 - 3.6. 日本：図集
4. 『回想記』における琉球
 - 4.1. 『回想記』の叙述
 - 4.2. リュミンの叙述
 - 4.3. ステパノフの叙述
 - 4.4. 大島の叙述 『大島代官記』
 - 4.5. 鹿児島島の叙述 『薩陽落穂集』
 - 4.6. 史料の比較調査・解説
 - 4.7. まとめ
 - 4.8. 琉球：図集
5. ベニョフスキの伝説化
 - 5.1. 『回想記』に伴ったベニョフスキの変容：原稿—初版—編訳—派生作品
 - 5.2. 他国のベニョフスキ：ベニョフスキのアイデンティティーと社会的文脈
 - 5.3. ベニョフスキの追跡旅・現在の認識と解釈
 - 5.4. 結論：日本・琉球の体験を踏まえて『回想記』とベニョフスキの再評価

5.5. ベニョフスキの伝説化：図集

6. 参考文献

- 6.1. 日本語
- 6.2. 欧州言語
- 6.3. 図目録

7. 資料編

- 7.1. 土佐国
- 7.2. 阿波国
- 7.3. 奄美大島
- 7.4. オランダ商館の書類
- 7.5. 『リュミンの記録』
- 7.6. 『ステパノフの記録』
- 7.7. タイムライン
- 7.8. 経緯一覧表
- 7.9. 『ベニョフスキの地図』

1. 序論

1.1. ベニョフスキの略歴

本論文の主題は様々な文脈で多様に理解されているベニョフスキという人物と彼をめぐる文化的現象である。ベニョフスキは18世紀に生きた歴史的な人物である一方で、ベニョフスキをめぐる文化的影響は現在にも生き続けている。そして、現在そのベニョフスキの影響はグローバル時代において、更に多様化し、広範囲に及んでいる。

マウリティウス・ベニョフスキは1746年9月22日に現在のスロバキアに位置するヴルボヴェ(Vrbové)で生まれた¹。ポーランド・リトアニア共和国においてロシア帝国の政治的な影響およびその帝国に操られたポーランドの国王に反するバール連盟という武装運動に関わった。1769年に対戦で怪我を負い、捕虜としてロシアの奥に送られた。ほぼ1年間のシベリアの流浪の後1770年10月に目的地に到着した。ベニョフスキの指導で反乱を起こした流刑者が翌年の1771年4月にボルシャ川の河口に冬を過ごしていた聖ペトロ号のガリオット帆船に乗船し、太平洋へ脱出することに成功した。

本論文の研究で重要な点はベニョフスキがマカオへの通航中に日本および琉球の何ヶ所かに寄港したことである。その前に北太平洋を巡航し、マカオの直前に台湾へも到来したと主張されているが、数ヶ月間マカオで過ごしてから、生き残った脱走者はフランスの帆船でヨーロッパへ戻った。当時ヨーロッパではベニョフスキが体験した海域に関する情報は稀だった。そこで、1772年にフランス王国の任務に就いたベニョフスキはその外務大臣

¹ 「Matheus Mauritius Michaël Franc. Seraph. Verbó BENYOVSZKY」, 参照: 1.6 「洗礼記録」。

のデギュイヨン公爵²のために地図を作成し、自分の航海日誌を渡したと思われる。1779年から編集していた『回想録と旅行記』のフランス語の原本3巻および複数の図³が1783年末にマダガスカル探検の資金の担保として預けられたが、ベニョフスキの没後に原本がウィリアム・ニコルソン(William Nicholson)に翻訳と編集のため譲られ、1790年に出版された⁴。以下に省略で『回想記』と呼ばれる。

1.2. 研究設定

ベニョフスキの『回想記』は驚くほど大人気を納め、数年で複数言語に翻訳され、演劇、オペラ、詩や小説に作品化された。しかしながら、『回想記』によりベニョフスキの伝説は時代を超えて現代にも続けて発達し続けている。『回想記』の範囲はベニョフスキの誕生から1776年にマダガスカルを去った時点までであり、没まで10年間の空白がある。ベニョフスキの一般的に知られる履歴と本人が『回想記』に記す自叙伝は、実は内容が大きく異なるため、時代の経過とともに数多くの研究の中で『回想記』およびその著者はその信憑性が議論されるようになった。ベニョフスキの出自についてもこのような論争が数多く続いている。

一般的にベニョフスキの評判は時代、地域、メディアによって二極化した。ほとんどの西欧の研究ではベニョフスキは「ほらふき男爵」のように扱われるようになった。その他方、ベニョフスキが生まれた東欧では、ベニョフスキは高潔な国民的英雄として生き続けている。しかも、ポーランド、ハンガリー、スロバキアは、それぞれベニョフスキの国籍が自国のものであると議論し続けている。

未だベニョフスキの国籍あるいは『回想記』の信憑性を巡って論争している様々な研究者の研究の中に、その偶然の東欧探検家は実際にどのように日本を体験したか、どこに行ったか、何をしたか、その答えを確認することはできず、曖昧な信憑性の『回想記』に頼るしかなかった。一方、日本の歴史学研究の中でベニョフスキはどのような人物として認識されたのか、日本史においてどのような役割を果たしたのか、日本側でも様々なベニョフスキ像が発達したのだろうか、という問題を考える中で本論文の主題と関連づけられることになった。しかも、東欧と日本において、ベニョフスキの研究の内容はもちろん、ベニョフスキがどのような人物として認識され評価されているかは大きく異なっており、それぞれの国や地域でベニョフスキの資料を収集していくに伴って、巨大に膨らんでいくその主人公の伝説そのものがこの研究の主要な問いになった。

² Emmanuel-Armand de Vignerot du Plessis de Richelieu, duc d' Aiguillon (1720-1782)。

³ *Benyowsky Memoirs and Travels, with maps & drawings* (大英図書館蔵) 以下は「原本」という。

⁴ Mauritius Augustus Count de Benyowsky, *Memoirs and travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky (...). Written by himself*, trans. ed. William Nicholson (London: G. G. J. and J. Robinson, 1790). 以下は「初版」という。

1.3. 研究方法論

本論においては、ベニョフスキという「作者」は「歴史上の人物」として同一視しない。『回想記』の中の「声」はベニョフスキのものではない。『回想記』の中の叙述の誇張、粉飾、不正確はその主語のベニョフスキ人物の属性として読み取られているが、テキストの中の声、歴史上の人物、それぞれ全く別の存在であることが示されている。次に、歴史と過去の構想を明らかに区別し、歴史を歴史学という意味で考える。歴史学および文学、両方は言語に考える人間に、言語で執筆されており、言語で解釈される文書であるゆえ、同様にデリダなどの批判的理論が適用される。特に新歴史主義のアプローチで「事実の歴史」と「空想の文学」という伝統的な二元対立が脱構築されている。本論文では『回想記』が同時に歴史史料として批判し、それに描かれた歴史事情はいかに表現されたか追求する一方で、文学的作品として普及した『回想記』の歴史の変容も分析し、それぞれの改作地域と時点の社会・文化的な事情を示した。新歴史主義的アプローチで解釈人類学の「濃い記述」の分析方法を適応されており、事実を追求するよりも、あらゆる文化的表現で意味を追求する。大規模の叙述に集中する代わりに、個人の視点から解釈されている人生の体験が歴史研究の表に出されている。ゆえに、本論文では同じ異文化接触の歴史事件について様々な言語の様々な文化の個人の視点が紹介されており、複数言説の相互作用が分析されている。それをもとに、今までになかった新たな濃い記述のような日欧接触事例の解説が目指されている。このようにこれまでのベニョフスキの歴史学的認識を更に拡張するために、これまでの史料を再検討するために新たな史料へのアプローチを導入する。今まで地理的、言語的な理由で繋がられていなかった外国語史料を比較参照し、これまでとは違ったベニョフスキや『回想記』の解釈を提示しようと試みる。結果的に本論文で『回想記』に描写されている東欧人の航海および日本・琉球海岸での現地住民との接触は相互視点から論じられている。そのようにして、日本近世期の対外関係や海岸地域の住民の社会との接触、つまり日本の歴史的叙述から排除されている叙述は外の視点が提供されると同時に、東欧人が記述した日本・琉球の体験も現地住民の視点から再解釈することができる。

1.4. 本論文の概要

本論文の目標はベニョフスキの自伝である『回想記』をポスト構造主義的アプローチによって再解釈することにより、地理的、時間的に離れている言説を分権し、新たな方法で組み替え、自分なりの解釈を紹介することである。それゆえ、筆者は断片的かつ優位の言語と価値観を優先せず、様々な声に権利を与え、複数の解釈、複数イデオロギーと価値観を『回想記』の中に見出そうとする。まず第2章において著者が届けることができるいくつか地域の、ベニョフスキが取り上げられている文献を収集し、概要を示した上で批判的に解題する。様々な地域とその欧州言語で作成された史料、また事件が起きた日本の史料を検討し、別な地点、別の時点で、いかに『回想記』、1771年の日本および琉球の寄港、ま

たベニョフスキの人物が解釈されたか、なぜその地点と時点でそのような質問がされ、そのような議論が挙げられたかという論点について分析する。それぞれの地域でベニョフスキと交流した人々の経験は異なる。いわば史料に残された様々な声の断片を組み合わせ、解釈の網をつなぎながら、当時の事件を再構成してみたいと思う。

ベニョフスキの航海は過去に起こった事象の連鎖であり、タイトルが示すとおり『回想記』は作者(ベニョフスキ)が過去の様々な事象の連鎖を描きつつ、作者(ベニョフスキ)の思い出が記されている。本研究は『回想記』の他に関連した事象を記録した史料を相互比較しながら、『回想記』の史実を再確認し、時には再構成しようと試みる。『回想記』に描かれた西洋人の視点とおりに日本および琉球の体験はそれぞれ第3章、第4章に取り上げた。筆者は『回想記』に暗示されている奄美および四国へ調査に赴き、現地で記録されたベニョフスキ関連史料を確認しながら、実際に奄美および四国のどの地域にベニョフスキ一行が投錨したのかを確定しようと試みた。現地資料に記録された当時の叙述が確認されており、現時点で著者が当地へ旅立ち、環境調査する可能性があったことはその研究範囲の根拠である。

現代的な表現を使えば、多様な背景を持つ「多国籍」の乗組員が、日本および琉球で2つの地域へ到来した事件は、インパクトが大きい事件であった。しかしながら、日本幕府側の史料と『回想記』に記された内容は2カ所の言及共に大きく内容が異なっている。そこで、第3章および第4章の主な目的は『回想記』でベニョフスキに描かれている事件を、『回想記』とベニョフスキの声が分権されているという視点で紹介することである。まず、『回想記』という文書だけでなく、ベニョフスキに記された地図の叙述および日本で残された手紙の叙述を考慮に入れ、ベニョフスキ自身の様々な叙述の相違と相似を比較しながら、『回想記』の記述の史実的優位性を反証する。同時に、同事件の当事者、つまりロシア人の乗組員および現地で対応した日本人に残された叙述を比較参照することにより、ベニョフスキ叙述の権威が分権されていると主張する。つまり、本論は複数の言語に分配されている声を確認し、その声の真正さについて考え、可能な限り、それぞれの当事者の発言の権利を取り戻す。いわば、歴史家の裁判官というよりも、歴史通訳者のように中間に入り、数百年後の再会の司会役を果たしたい。そこで、まずそれぞれの叙述の相違点を示すことにより、同事件への複数視点と解釈の多様性を示し、それに影響する権力関係、文化の文脈を解釈する。また、それぞれの立場によって残された叙述の相似点を紹介することにより、中立をとった解釈を試み、事件に関する「妥当性」を裁定する。司会および通訳は裁判官と同様に、自分なりの解釈があるが、裁判官と違って司会および通訳の意見は決定的ではない。当然ながら、本論文著者はここに提供されている解釈は客観かつ確実な解釈であるという幻想は抱いていない。既に述べたように、このような解釈は不可能である。著者は3つの言語(英語、ドイツ語、ロシア語)の資料を4つ目(日本語)に翻訳するが、その中で1つも母国語ではない状況も、叙述の内容に無影響ではない。すでに複数抄訳を受けた史料を更に日本語で紹介することは、間違いを重ねて史料を誤って評価する危険性が

ある。しかしながら、前述されているように、同言語での意思疎通の場合も完全な理解が不可能であるし、著者に可能な限りそれぞれの資料から読み取れる複数の叙述を日本語で普及することは価値があると思われる。そのようにベニョフスキおよび『回想記』に関する言説を広げることで、次なる創造的な解釈の可能性を期待したい。

ベニョフスキは過去に生きていた「人物」であり「事象」である。つまり、ある文化の言語に生まれた歴史上の人物として、その時代に生きた証(痕跡)を残し、同時にその痕跡は当時の言語的文化的な特質も備えていた。上述した『回想記』などの叙述により自分の存在の痕跡を残し、ベニョフスキあるいは彼の活動について述べた他の人物もベニョフスキの存在の意味を書き直していた。ベニョフスキは他の一般的な人間と同じように、ある時に身体的にこの世に生起し、滅尽したが、また同時に歴史的、文学的、あるいは文化的な現象として生き続けている。『回想記』は自伝であるなら、一般的にその著者の視点を通して、過去の事件および著者の行動、著者の意見を読み取ることにより、著者はどのような人物だったか、理解するのが期待されている。しかしながら、ポスト構造主義的視点から見れば、著者は固定した個人ではなく、その著書に影響を与えた社会文化の文脈は共著者として考えられる。つまり『回想記』はある意味でベニョフスキの前に創造された文脈によって構成されている。さらに、『回想記』はベニョフスキ自身の影響から別の文脈で、別の人物に解釈され、書き直されている。時に、翻訳をとおして様々な場所、時代、言語とその文化文脈において編集されており、複数・複合的解釈を持った叙述として普及しながら、ベニョフスキは常に変容する人物として生き続けている。したがって、第5章には世界中に分配されているベニョフスキ、彼の『回想記』およびそこで描かれた日本・琉球に関する叙述を収集し、比較分析する。日本とヨーロッパの各地の現地調査および多言語的な文献、メディア、大衆文化の幅広い調査により、複数地域で時間が経つに連れてベニョフスキの文化的アイデンティティーがいかに変容し、合成化してきたことが示されている。また、それぞれの地域と期間の相違と相似を指摘することにより、様々な議論と言説が検討されている。どのような文化的文脈でどの権力に推進されていた観念形態が当時のベニョフスキの形に影響したかということが示されている。

本章の議論の流れに従って再説すれば、第一に『回想記』は変更された意味の連続として検討されている。初版を先立つ原本、および原本が基にした文書の痕跡が検討される。次に『回想記』が当時のヨーロッパで評判になった時代に、次々と普及した様々翻訳は、それぞれの言語社会的環境において多様に記述内容が調整され、新たな『回想記』の文化的意味を付与されたことを示す。いわば、『回想記』は唯一無二のベニョフスキの参考資料ではなく、起源のない、おそらく結末もない変容する過程として紹介されている。したがって、3つの地域でベニョフスキの文化的アイデンティティーが別々に変容してきた過程が紹介されている。具体的には、日本でハンペンゴロウの身元がどのようにベニョフスキと変更し、その人物が日本の歴史学と文学にどのように位置付けられているか、それぞれの地域と地点でいかに解釈と使用されてきたか指摘されている。次に、いわゆる西欧、つま

り特にイギリスとフランスで、『回想記』の初版の時代から最新の文献まで、いかにベニョフスキの名誉が変更してきたか、どのような西洋のイデオロギーがベニョフスキおよび『回想記』を形態し、したがってそれぞれを処分したかということが取り上げられている。最後にいわゆる東欧、つまりベニョフスキがおそらく最も強く文学および一般的な知識で普及されている地域において、いかに複数国家に伝説化され、私物化されているか、どのようなイデオロギーに使用されてきたかという問題が検討されている。

結論として『回想記』をポスト構造主義的アプローチによって再解釈することによりベニョフスキを生き続けている文化的人物として紹介されている。生まれた地域の言語と文化の文脈に形態され、活動的な人生を通して自分を書き直していた。人生のそれぞれの時点で変容し、別のベニョフスキであり、あるいはベニョフスキに成っていた。世界中に様々な地域で痕跡を残したが、一番普及しているのは彼の自伝である。現在まで『回想記』のあらゆる編集および関係叙述を通してベニョフスキが変容し、現在でも続きに読者に再解釈され、数多く意味に発達してきた。複数の地域の複数言語、複数文化、複数観念形態から合成しているベニョフスキの文化的アイデンティティーは流動的な生きている過程である。ゆえに、それぞれの地域で異なる言説が行われており、ベニョフスキの評判は一致していない。『回想記』は合成的な文書で、決定的に評価できない叙述が数多くあり、「真実」「虚偽」という範疇で全体的にその作品を評論することができないと同じように、ベニョフスキも誰だったかという質問に複数な方法で答えることができる。それぞれの評価の受け取り方は主に当地の文化的な文脈次第である。

人間は皆言語的な存在を送り、活動的に自分の文学的な特質を編集する力があり、将来のため自分の痕跡を残すことができる。それは特に作者および日記を作成する際に適用される可能性である。しかし、人間はあらゆるテキストにより将来の歴史観を形態する。伝記や自伝というのは特に文書と人生の関係性を結びつけるものであり、文学および歴史学に検討されている。ゆえに、そのテキストの種類は特にポスト構造主義的視点から人間の文学的・言語学的な側面を分析することを可能にする。ベニョフスキの特別な自伝を検討してから、結論として著者は著書を著すと同様に著書に著されると述べたい。なぜ、それは特に現在に重要であるのか。なぜなら、現在にますますグローバル化する社会において、これまでにはなかった規模で人間はソーシャルメディアなどにより無意識的に多くの自伝的な記録を作成していく。本論文で示されたのは、「人間は自分で自分のアイデンティティーを編集するとともに、ベニョフスキと同様な程度で他人に再解釈され、書き直されている」という 21 世紀的時代に生きる人間の必然であるとも言える。本論はベニョフスキの名誉復活の為に書かれたのではない。ベニョフスキの人生は今を生きる我々にとって有意義な事例であると主張する。

6. 参考文献

6.1. 日本語

阿部重雄「ベニョフスキーとフヴォストフ」『大正史学』13(1983)13-14.

「奄美大島の相撲(歴史と文化)」電子ミュージアム奄美. アクセス2017年12月1日. <http://bunkaisan-amami-city.com/archives/2904>.

奄美宣教100周年記念誌編集部編『カトリック奄美100年』名瀬：奄美宣教100周年実行委員会, 1992.

有馬成甫「ベニョフスキーの来航に就いて」『海防』(10月1936).

「伊須シマ(集落)めぐり」奄美.asiaの活動報告. アクセス2018年5月3日. <http://amamiasia.amamin.jp/e423001.html>.

伊能嘉矩「「ベネオフスキーの臺灣探検」『台湾文化志』下巻(東京：刀江書院, 1928)」『柳田國男の本棚』第3巻. 東京：大空社, 1997.

岩崎奈緒子「「加模西葛杜加国風説考」の歴史的意義」『境界から見た内と外：「九州史学」創刊五〇周年記念論文集・下』九州史学研究会編. 東京：岩田書院, 2008.

—「世界認識の転換」『岩波講座・日本歴史・第13巻』大津透編その他, 33-66. 東京：岩波書店, 2015.

大熊良一「ベニョフスキーと北方海域の航海」『千島小笠原島史考』東京：しなの出版, 1969.

—『異国船琉球来航史の研究』東京：鹿島研究所出版界, 1971.

「海域火山データベース」海上保安庁・海洋情報部. アクセス2018年8月3日. <http://www1.kaiho.mlit.go.jp/GIJUTSUKOKUSAI/kaiikiDB/kaiyo13-2.htm>.

笠井藍水『日和佐郷土誌』日和佐：日和佐町公民館, 1957.

木崎良平「わが国におけるロシア研究の胎動「ベニョーフスキー事件」を中心として」『鹿大史学』通号13(1965)：29-53.

グレジユク、シモン、「イヴァン・リュミンに描写されたウスマイ人が住む島～奄美大島の1771年の東欧人寄港事件～」『国際琉球沖縄論集』第7号（3月2018）：67-77.

郡山良光「ベニョフスキーの大島寄港地」『日本歴史』第319号(12月1974)：47-49.

佐光昭二『阿波洋学史の研究』徳島：徳島県教育，2007.

茂野幽考『薩藩切支丹史料集成』鹿児島：南日本出版文化協会，1966.

「裳付姿の遊行の僧」日本服飾史. アクセス2018年7月25日.
<http://costume.iz2.or.jp/costume/512.html>.

『スーパー大辞林』東京：三省堂：2013.

関田駒吉「フオン・ベニョーウスキイの土佐漂着」『関田駒吉歴史論文集・第1巻』高知：高知市民図書館，(1931)1979.

瀬戸内町図書館・郷土館『瀬戸内町の文化財をたずねて』瀬戸内：瀬戸内町教育委員会，2001.

一.『奄美大島南部瀬戸内町文化財ハンドブック。せんとうち-歴史・文化・自然-』瀬戸内：瀬戸内町教育委員会，2012.

「僧侶鈍(純)色五條袈裟姿」日本服飾史. アクセス2018年7月25日. <http://costume.iz2.or.jp/costume/454.html>.

田保橋潔『近代日本外国関係史・増訂』東京：原書房，(1928)1976.

照屋善彦「19世紀琉球における欧米との異文化接触(1)～言語問題～」『沖縄大学人文学部紀要』第1巻（3月2000）：1-10.

徳島の古文書を読む会一班『史料集(十)文政十二年十二月異国船牟岐浦漂着一巻』徳島：徳島の古文書を読む会一班，2012.

豊見山和行「一七世紀における琉球王国の対外関係—漂着民の処理問題を中心に」『十七世紀の日本と東アジア』藤田覚編，101-122. 東京：山川出版社，2000.

名越左源太『南島雑話』國分直一，恵良宏校注. 東京：平凡社，1984.

名越佐源太『挿絵で見る「南島雑話」』野尻純一，入佐一俊編，鹿児島県立大島高等学校南島雑話クラブ訳. 奄美：奄美文化財団，1997.

昇曙夢『大奄美史』鹿児島：南方新社，(1949)2009.

沼田次郎「ベニョフスキー(日本名はんべんごろ)の日本来航時に残したドイツ語書翰について」『蘭学資料研究会・研究報告』第122号(11月1962)：1-14.

—。「ベニョフスキー(いわゆるハンペンゴロウ)事件とその影響—書翰の紹介を中心として」『対外関係と社会経済—森克己博士還暦記念論文集—』森博士還暦記念会編，199-218. 東京：塙書房，1968.

ベニョフスキー、モーリツ. 『ベニョフスキー航海記』沼田次郎，水口志計夫編訳. 東京：平凡社，1970.

「ベニョフスキー」『南海日日新聞』2009年11月22日.

松田毅一「ベニョフスキー「日本渡航記」」『清泉女子大学紀要』第15号(12月1967)：95-122.

—。「ベニョフスキーのベーリング島滞在」『北方文芸』第7号(1943)：16-23.

松本博「ベニョフスキー漂着のころ」『明治維新と阿波の軌跡：新しい地域史像を求めて』徳島：教育出版センター，1977.

水野康次郎『瀬戸内町集落聞き取り調査結果(初版)』瀬戸内：奄美.asia，2014.

美波町産業振興課『日和佐地区散策絵地図(第4版)』阿南：米崎印刷株式会社，(2009)2016.

みなもと太郎『風雲児たち第六巻：海から来た男』東京：潮出版社，1984.

三宅米吉「ベニョフスキ」『歴史地理』第8巻，第3号(3月1906)：191-204.

室戸市史編集『委員会室戸市史・上巻』室戸：室戸市，1989.

「屋久島に密入国したローマ人～新井白石とシドッチ～」古文書コーナー．アクセス2018年5月25日．http://www.hh.em-net.ne.jp/~harry/komo_hakusekisidotti_main.html.

楊大為「奄美大島のカトリック教会と地域社会の関係に関する人類学的考察 ～小宿教会の事例を中心に～」『地域政策科学研究』第11巻（3月2014）：178．アクセス2018年5月25日．<http://hdl.handle.net/10232/20726>.

渡辺京二「はんべんごろうの警告」『黒船前夜：ロシア・アイヌ・日本の三国志』東京：洋泉社，2010.

6.2. 欧州言語

Adams, Percy G. *Travelers and travel liars*. New York: Dover Publications, 1980.

Anson, George. *A voyage round the world, in the years MDCCXL, I, II, III, IV*. Edited by Richard Walter. London: John and Paul Knapton, 1748.

—, *Voyage Autour du Monde, Fait Dans Les anees 1740, 41, 42, 43, & 44*. Paris: Quillau, Delormel and Le Loup, 1750.

Bandzo-Antkowiak, Małgorzata. “Maurycy August Beniowski – confabulator or discoverer? Map of his journey found.” *Geographia Polonica* 86, no. 2 (2013): 171-173.
<https://doi.org/10.7163/GPol.2013.17>.

Barthes, Roland. “The Death of the Author” *Aspen* 5-6 (1967). UbuWeb. Accessed October 3, 2018. <http://www.ubu.com/aspen/aspen5and6/threeEssays.html#barthes>.

Beillevaire, Patrick. *Ryūkyū studies to 1854: Western encounter part 1*. Richmond: Curzon, Tokyo:Edition Synapse, 2000.

Beniowski, Maurycy. *Historia podróży y osobliwszych zdarzeń sławnego Maurycego-Augusta hrabi Beniowskiego szlachcica polskiego i węgierskiego, zawierająca w sobie jego czyny wojenne w czasie konfederacyi barskiej, wygnanie iego najprzód do Kazanu, potym do Kamszatki, waleczne iego z tey niewoli oswobodzenie się, iego podróż do Kalifornii,*

potym przez Ocean Spokoyny do Japonii, Formozy, Kantonu w Chinach, założenie przez niego osady na wyspie Madagaskarze, z zlecenia Francuzkiego Rządu, iego na tey wyspie woienne wyprawy, uznanie iego nareszcie Najwyższym iey Rządzcą. Z Francuzkiego Tłomaczona. Warszawa: Tomasz Le Brun, 1797.

— . *Pamiętniki. Fragment konfederacki*. Translated by Leszek Kukulski. Edited by Stanisław Makowski, Warszawa: PIW, 1967.

— . *Pamiętniki*. Translated by Edward Kajdański. Warszawa: Volumen, 1995.

Benjowski, Moritz August. *Des Grafen Moritz August von Benjowski Reisen durch Sibirien und Kamtschatka über Japan und China nach Europa. Magazin von Merkwürdigen neuen Reisebeschreibungen*, vol. 3. Berlin: Voß, 1790.

— . *Begebenheiten und Reisen des Grafen Moritz August von Benjowski, von ihm selbst beschrieben. Aus dem Englischen übersetzt von J. D. Ebeling, Professor am Gymnasium in Hamburg, und P. C. Ebeling, Stadt und Landphysikus in Parchim. Mit des erstern Anmerkungen und Zusätzen, wie auch einem Auszuge aus Hippolitus Stefanows russisch geschriebenen Tagebuche über seine Reise von Kamtschatka nach Makao. Mit Landkarten und Kupfern. Mit allergnädigsten Freiheiten*. Translated and edited by Johann Dietrich Ebeling and Philipp Christian Ebeling. Hamburg: Benjamin Gottlieb Hoffmann, 1791.

— . *Des Grafen Moritz August von Benyowsky, Ungarischen und Pohnischen Magnaten, und Eines von den Häuptern der Pohnischen Conföderation, Schicksale und Reisen, von ihm selbst beschrieben: Dessen Kriegsoperationen in Pohlen und Gefangenschaft in Kamtschaka*. Translated by Georg Forster, Leipzig: Dykischen Buchhandlung, 1791.

Benyowsky Memoirs and Travels, with maps & drawings. Add MS 5359-5362 British Library Manuscripts Collection, London. (原本)

Benyowsky, Maurice Auguste. *Les memoires et voyages de Maurice Auguste: comte de Benyowsky; magnat des royaumes D'Rongrie et de Pologne, un des chefs de la confederation de Pologne, &c. &c. Ecrits par lui-meme, et publies d'apres le*

manuscrit original. En Deux Tomes. Londres: G.G.J. & J. Robinson, Paternoster Row, 1790.

- . *Voyages et mémoires de Maurice-Auguste Comte de Benyowsky, Magnat des Royaumes d' Hongrie et de Pologne, etc. etc. Contenant ses Opérations militaires en Pologne, son exil au Kamtchatka, son Evasion et son Voyage à travers l' Océan pacifique, au Japon, à Formose, à Canton en Chine, et les détails de l' Etablissement qu' il fut chargé par le Ministère François de former à Madagascar.* Paris: Buisson, 1791.

Benyowsky, Mauritius Augustus. *Memoirs and travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky; magnate of the Kingdom of Hungary and Poland, one of the Chiefs of the Confederation of Poland, &c, &c. Consisting of his military operations in Poland, his exile into Kamchatka, his escape and voyage from that peninsula through the Northern Pacific Ocean, touching at Japan and Formosa, to Canton in China, with an account of the French Settlement he was appointed to form upon the island of Madagascar. Written by himself. Translated from the original manuscript. In two volumes.* Translated and edited by William Nicholson. London: G. G. J. and J. Robinson, 1790. (初版)

- . *The Memoirs and Travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky in Siberia, Kamchatka, Japan, the Liukiu Islands and Formosa. From the translation of his original Manuscript (1741-1771), by William Nicholson, F.R.S.* Edited by Captain Pasfield Oliver. London: T. Fisher Unwin, 1893.

- . *Memoirs and travels of Mauritius Augustus count de Benyowsky.* Edited by Samuel Pasfield Oliver. London: K. Paul, Trench, Trübner & co., 1904.

Benyovszky, Móricz. *Gróf Benyovszky Móricz életrajza, saját emlékiratai és útleírásai. Képekkel, térképekkel, autographokkal,* 4vols. Translated and edited by Mór Jókai, János Jankó. Budapest: Kiadja Ráth Mor, 1888-1891.

Bejowszký, Maurice Auguste. *Carte de la Mer Oriental du Nord entre les Costes de l'amerique, Occidentale et celles de la Tartarie Orientale ; avec les Isles Nouvellemen decouvert dedié a Monseigneur, le duc D'aiguillon Paire de France Ministre et Secretaire d' Etat.* France: Bejowszký, 1772. Ds.8876. Centralna Biblioteka

Geografii i Ochrony Środowiska PAN. Warszawa. Accessed November 29, 2018.
oai:rcin.org.pl:45276.

Beňovský, Móric A. *Denník Mórica A. Beňovského*. Translated by Anton Špiesz. Bratislava: Tatran, 1966.

—. *Pamatné přjehody hraběte Beňowského, na wětssjm djle od něho samého sepsané, we wýtah pak uwedené a přeložené. Péči a nákladem Insstytutu Literatury Slowenské*. Edited and translated by Samuel Černansky. Presspurk: Ssimon Petr Weber, 1808.

Benyowszky, Mauritius. *Protocolle du Regiment des volontaire de Benyowszky crée en 1772*. (Manuscript in the British Library).

Barbier, Antoine-Alexandre. *Dictionnaire des ouvrages anonymes et pseudonymes en français*,
vol. 2. Paris: Imprimerie bibliographique, 1806.

Б е р х , В а с и л и й Н . “ П о б е г Г р а ф а В е н ь е в с к а г о и з
К а м ч а т к и в о Ф р а н ц и ю . ” *С Ы Н О т е ч е с т в а* ,
no. 27(1821): 3–23, no. 28(1821): 49–79.

Б л у д о в , Д м и т р и й Н . “ З а п и с к а о б у н т е ,
п р о и з в е д е н н о м Б е н е в с к и м в Б о л ь ш е р е ц к о м
о с т р о г е и о п о с л е д с т в и я х о н о г о . ” *Р у с с к и й
а р х и в* 4 (1865): 417–438.

Boïeldieu, François-Adrien, and Alexandre Duval, and Julien M. Gue. *Béniowski, ou les Exilés du Kamchatka: opéra en trois actes*. Paris: Théâtre de l' Opér Comique National, 8 juin 1800.

Broughton, William R. *A voyage of discovery to the North Pacific Ocean: in which the coast of Asia, from the lat. of 35° north to the lat. of 52° north, the island of Insu (commonly known under the name of the land of Jesso,) the north, south and east coasts of Japan, the Lieuchieux and the adjacent isles, as well as the coast of Corea, have been examined and surveyed. Performed in His Majesty's sloop*

Providence and her tender, in the years 1795, 1796, 1797, 1798. London: T. Cadell and W. Davies, 1804.

Bukowiecka, Zofia. *Pamiętniki Beniowskiego: Syberya, Daleki Wschód, Madagaskar.* Warszawa : Nakład Gebethnera i Wolffa, 1909.

“Cambridge Analytica Files.” *The Guardian*. Accessed October 9, 2018. <https://www.theguardian.com/news/series/cambridge-analytica-files>.

Ciel, Igor, dir. *Vivat Beňovský!, Vivát Benyovszky!*. Československá Televízia, Magyar Televízió, 1975.

Cieslik, Hubert. “The Case of Christovão Ferreira.” *Monumenta Nipponica* 29, no. 1 (Spring 1974): 1-54.

Cook, James and James King. *A voyage to the Pacific ocean. Undertaken, by the command of His Majesty, for making discoveries in the Northern hemisphere, to determine the position and extent of the west side of North America; its distance from Asia; and the practicability of a northern passage to Europe. Performed under the direction of Captains Cook, Clerke, and Gore, in His Majesty's ships the Resolution and Discovery, in the years 1776, 1777, 1778, 1779, and 1780.* London: W. and A. Strahan, for G. Nicol, & T. Cadell, 1784.

Danieluk, Robert SJ. “‘Milczenie’ po polsku: Wojciech Męciński SJ (1598-1643) i jego długa droga do Japonii.” *Studia Bobolanum* 28, no. 2 (2017): 5-31. Accessed May 19, 2018.
http://bobolanum.pl/images/studia-bobolanum/2017/02/StBob_2017_2_Danieluk.pdf.

“Daghregister Nangasackij 1770-1771. 100-155.” *Archief Ned. Factorij Japan*. No. 11709. 東京大学史料編纂所蔵. マイクロフィルム6998-1-22.

de P., Paul. *Exilé et captivité du Comte de Benyowsky. Histoire des prisonniers célèbres, vol. 5.* Paris: Locard et Davi, 1821.

Derrida, Jacques. *Of Grammatology*. Translated by Gayatri Chakravorty Spivak. Baltimore:

John Hopkins University Press, 2016.

“Dominus ac Redemptor (1773).” *The Portal to Jesuit Studies*. Accessed May 25, 2018.
http://jesuitportal.bc.edu/research/documents/1773_dominusacredemptor/.

Drummond, Andrew. *The Intriguing Life and Ignominious Death of Maurice Benyovszky*. New York, Oxon: Routledge, 2017.

“Extraordinary Relation of a Voyage to Macao.” *Gentleman’s magazine and historical chronicle*, vol. 42 (June 1772): 272–273.

Fiedler, Arkady. *Jutro na Madagaskar*. Warszawa: Towarzystwo Wydawnicze “Rój”, 1939.

—. *Żarliwa wyspa Beniowskiego*. Letchworth: Letchworth Printers, 1944.

“Flags of the United Dutch East Indies Company.” Historical Flags of Our Ancestors. Accessed 8 August, 2018. http://www.loeser.us/flags/dutch_note_1.html.

Foucault, Michel. “What is an author?” *Société Française de philosophie*, 22 February 1969. Translated by Josué V. Harari. Generation online. Accessed November 21, 2018. http://www.generation-online.org/p/fp_foucault12.htm.

Gaubil, Antoine. “Mémoire Sur les Isles que les Chinois appellent isles de Lieou-Kieou, par le Pere Gaubil.” *Lettres édifiantes et curieuses, écrites des missions étrangères. Nouvelle édition, vol. 23*. Paris: J.G. Merigot, 1781.

Geertz, Clifford. *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books, 1973.

Gvadányi, József. *Rontó Pálnak egy magyar lovas Köz-Katonának és gróf Benyovszki Móritznak életek’: földön, tengereken álmélkodásra méltó történettyeiknek, ’s véghez vitt dolgaiknak le-írása*. Pozsonban és Komáromban: Weber Simon-Péter, 1793.

Hall, Basil. *Account of a voyage of discovery to the west coast of Corea, and the great Loo-Choo Island; with an appendix, containing charts, and various hydrographical and scientific notices*. London: John Murray, 1818.

- “Hoogduijtsche Brieven met dies Translaten van een vervallene Russische fregat aan deese kust A^o 1771.” Archief Ned. Factorij Japan. No. 11758. 東京大学史料編纂所蔵. マイクロフィルム6998-1-53.
- Hubbard, Jason. *Japoniae Insulae. The mapping of Japan. Historical Introduction and Cartobibliography of European Printed Maps of Japan to 1800*. Houten: Hes & De Graaf, 2012.
- Inkster, Ian. “Oriental Enlightenment: The Problematic Military Experiences and Cultural Claims of Count Maurice Auguste comte de Benyowsky in Formosa during 1771.” *Taiwan Historical Research* 17, no. 1 (2010): 27–70.
- Jankó, János. *Gróf Benyovszky Móríciz mint földrajzi kutató. Kritikai megjegyzések Kamcsatkától Macaoig tet útjára*. Budapest: Kilián, 1890.
- Jaxa-Bykowski, Piotr. “Awanturnicy XVIII wieku.” *Przewodnik Naukowy i Literacki* 14 No. 1–12 (1886); 14 No. 1–9 (1887).
- Jenkins, Kate. *Re-thinking history*. London: Routledge, 1991.
- Kajdański, Edward. “Kuro Siwo.” *Kontrasty* 9–12 (1986), 1 (1987).
- . “Beniowski na Morzu Beringa.” *Wybrzeże* no. 38–43 (1987).
- . *Niezwykły rejs “Św. Piotra i Pawła”*. Szczecin: Glob, 1987.
- . “Maurycy Beniowski i hrabia Błudow.” *Między Innymi*, no. 7–8 (1988).
- . “O żegludze Maurycego Beniowskiego wokół Tajwanu.” *Między Innymi*, no. 7–8 (1988).
- . “Autentyzm relacji Maurycego Beniowskiego z jego żeglugi przez Morze Beringa. Pierwszy opis i pierwsze rysunki wyspy Św. Wawrzyńca.” *Kwartalnik Historii Nauki i Techniki PAN* no. 3 (1988).
- . “Czy Beniowski kłamał?” *Kontrasty* no. 3 (1988).

- . “Beniowski na wyspach Riukiu.” *Kwartalnik Historii Nauki i Techniki PAN*, no. 2 (1989).
 - . “Maurycy Beniowski o prądach morskich Pacyfiku.” *Wiedza i Życie*, no. 3 (1990).
 - . “Beniowski odarty ze sławy odkrywcy.” *Morze*, no.5-6 (1992).
 - . “Autentyzm relacji Maurycego Beniowskiego z jego żeglugi przez Morze Beringa. Kontrowersje wokół położenia geograficznego dawnej wyspy Kadiak.” *Kwartalnik Historii Nauki i Techniki PAN*, no.2 (1993).
 - . *Tajemnica Beniowskiego. Odkrycia, intrygi, fałszerstwa*. Warszawa: Volumen, 1994.
 - . “Beniowski u wybrzeży Japonii.” *Gdańskie Studia Azji Wschodniej* 2 (2012).
 - . “Pod polską banderą w portugalskim Makau.” *Gdańskie Studia Azji Wschodniej* 6 (2014).
 - . *Odkrywca czy blagier? Maurycy Beniowski na Pacyfiku*. Gdańsk: Narodowe Muzeum Morskie, 2015.
 - . “Żegluga Beniowskiego wzdłuż wybrzeży Azji Wschodniej w świetle najnowszych odkryć (wyspy Bonin, Japonia, wyspy Liuqiu, Chiny, Makau).” *Gdańskie Studia Azji Wschodniej* 13 (2018).
- Keene, Donald. *The Japanese discovery of Europe, 1720–1830*. Stanford: Stanford University Press, 1969.
- Kotzebue, August von. *Graf Benjowsky oder Die Verschwörung auf Kamtschatka: Ein Schauspiel in fünf Aufzügen*. Leipzig, Paul Gottlieb Kummer, 1795.
- Kristeva, Julia. *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*. Translated by T. Gora et al. New York: Columbia University Press, 1980.
- Kropf, Lajos L. “Mauritius Augustus Benyowszky.” *Notes and Queries Ser. 8*, Vol.VI (22

December 1894): 481-483, Vol. VII (5 January 1895): 4-5, (26 January 1895): 63-65, (23 February 1895): 141-143, (30 March 1895): 243-245, (27 April 1895): 322-324, (25 May 1895): 403-404, (15 June 1895): 463-464.

Kubalski, Mikołaj A. *Vie et aventures du comte Maurice-Auguste Beniowski, résumées d'après ses mémoires (années 1767-1786)*. Tours: A. Mame, 1853.

Kuiper, Feenstra J. *Japan en de Buitenwereld in de Achttiende Eeuw*. Haag: Martinus Nijhoff, 1921.

Kunec, Patrik. "Sporný pobyt Mórica Beňovského v Spojených štátoch amerických v rokoch 1779 - 1780." *Vojenská história* 9, no.2 (2005): 92-101.

—. "Bojovník za slobodu alebo dobrodruh? Pobyt a aktivity Mórica Augusta Beňovského v Spojených štátoch amerických v roku 1782." *Acta historica Neosoliensia* 9 (2006): 38-47.

—. "Beňovského pobyty a aktivity v Amerike." *Móric Beňovský : legenda a skutočnosť. Zborník referátov z odbornej konferencie o Móricovi Beňovskom, ktorá sa uskutočnila vo Vrbovom 10. októbra 2006*. Edited by Ľubomír Bosák and Patrik Kýška. Vrbové : Mestský úrad, 2007.

—. "Účasť Mórica Beňovského v bojoch barskej konfederácie v rokoch 1768-1769: sumarizácia historických faktov." *Sborník prací Filozofické fakulty Ostravské univerzity 238 - Historie* 15 (2008): 119-137.

—. "Móric Beňovský - cestovateľ z existenčnej nutnosti alebo podnikavý dobrodruh?" *Acta historica Universitatis Silesianae Opaviensis* 3 (2010): 53-6.

—. "The Hungarian Participants of the American War of Independence." *Codrul Cosminului*, vol. 16 (2010): 41-57.

—. *Uhorskí apoľskí účastníci americkej revolúcie*. Krakov: Spolok Slovákov v Poľsku, 2012.

— and Martina Kubealaková. “Memoáre stredoeurópskeho dobrodruha Mórica Beňovského (1746–1786) ako obraz života emigranta a spoločenskej mobility v 2. polovici 18. storočia.” *Via viatores quaerit: Mobilnosť spoločna w dziejach krajów Grupy Wyszehradzkiej*. Edited by Agnieszka Tetrycz-Puzio, Lech Kościelak and Ewa Łaczyńska. Słupsk : Akademia Pomorska, 2016.

—. “Uhorský dobrodruh Móric August Beňovský ako neúspešný bojovník za slobodu USA.” *Romboid* LII, vol. 5–6 (2017): 113 – 121.

Kurowska-Puffke, Emma. *Maurycy August Beniowski : jego żywot oraz przygody z czasu pobytu na Kamczatce*. Poznań: J. Leitgeber, 1886.

Lange, Antoni. *Duma o Maurycym Beniowskim*. Kurier Warszawski 224 (1908): 3–5.

La Pérouse, Jean-François de Galaup. *Voyage de La Pérouse autour du monde, publié conformément au décret du 22 Avril 1771, et rédigé par M. L. A. Milet-Mureau, Général de Brigade dans le Corps du Génie, Directeur des Fortifications Ex-Constituant, Membre de plusieurs Sociétés littéraires de Paris*. Paris: Imprimerie de la République, 1797.

Lensen, George A. “Early Russo-Japanese Relations.” *The Far Eastern Quarterly* 10, no. 1 (November 1950): 11–14.

—. *The Russian Push Toward Japan: Russo-Japanese Relations, 1697–1875*. Princeton: Princeton University Press, (1959)1971.

Lepecki, Mieczysław. *Madagaskar - kraj, ludzie, kolonizacja*, Warszawa: Towarzystwo Wydawnicze “Rój” , 1938.

“Maurice Benyovszky” *Wikipedia*. Accessed October 1, 2018. https://en.wikipedia.org/wiki/Talk:Maurice_Benyovszky.

—. *Maurycy August hr. Beniowski. Zdobywca Madagaskaru*. Warszawa: Ludowa Spółdzielnia Wydawnicza, 1961.

Magyar Madagaszkári Társaság. Accessed October 1, 2018. <http://www.benyovszky.hu>.

- Martin, Alison. "Foreign credit: travel writing and authenticity in the dutch translation of The memoirs and travels of Mauritius Augustus, Count de Benyowsky (1790)." *inTRAlinea* (2013). Central Archive at the University of Reading. Accessed November 27, 2018. <http://centaur.reading.ac.uk/35863/>.
- Meskens, Jean-Marie. *Un episode dans la vie de Maurice Beniowski*. Nowa Sól: Fundacja im. Maurycego Beniowskiego, 2017.
- Meusel, Johann G. *Vermischte Nachrichten und Bemerkungen historischen und litterarischen Inhalts*. Erlangen: Palm und Enke, 1816.
- Modelski, Teofil E. "Uwięzienie hrabiego Beniowskiego i barona Jungburga na Spiszu w r. 1768." *Przewodnik Naukowy i Literacki* (1917): 664-667.
- Musil, Miroslav. *Skutočný príbeh grófa Mórica Beňovského*. Bratislava: Vydavateľstvo Spolku slovenských spisovateľov, 2017.
- Mühlbach, Louise. *Graf von Benjowsky. Historischer Roman*. Jena, Leipzig: Hermann Costenoble, 1865.
- Nižnánsky, Jožo. *Dobrodružstvá Mórica Beňovského*. Praha : L. Mazáč, 1933.
- Orłowski, Leon. *Maurycy August Beniowski*. Warszawa: Wiedza Powszechna, 1961.
- Pavliková-Vilhanová, Viera. "The Image of Count Benyowsky and His Odyssey in Slovakia." *Asian and African Studies* 26 (1991): 176-177.
- . "Archival Sources Concerning Count Morice Benyowsky' s Activities on the Island of Madagascar and Elsewhere." *Human Affairs* 10 no.2 (2000): 163-170.
- Prevost, Antoine Francois. *Histoire Generale des Voyages*. Paris: Didot, 1750.
- Raharolahy, Mamy. *Les évadés du Kamtchatka*. Madagascar: POLka, 2017.
- Raspe, Rudolf E. *Baron Munchausen's Narrative of his Marvellous Travels and Campaigns in*

Russia; humbly dedicated and recommended to country gentlemen, and if they please to be repeated as their own after a hunt, at horse races, in watering places, and other such polite assemblies; round the bottle and fireside. Oxford: Smith, 1786.

“Review of New Publications. 150. Memoirs and Travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky.” *The Gentleman’s Magazine and Historical Chronicle* 60, no. 2 (August 1790): 725–727.

Roberts, Luke. *Performing the great peace: political space and open secrets in Tokugawa Japan*. Honolulu: University of Hawai’i Press, 2012.

—. “Shipwrecks and Flotsam: The Foreign World in Edo-Period Tosa.” *Monumenta Nipponica* 70, no. 1 (2015): 83–122.

Robertson, Joshua. “Australian convict pirates in Japan: evidence of 1830 voyage unearthed.” *The Guardian*. Accessed May 28, 2017.
<https://www.theguardian.com/australia-news/2017/may/28/australian-convict-pirates-in-japan-evidence-of-1830-voyage-unearthed>.

Roszko, Janusz. “Beniowski na Madagaskarze.” *Kontrasty* 2–12 (1988).

—. *Awanturник nieśmiertelny*. Katowice: Śląsk, 1989.

Рюмин, Иван. “Записки канцеляриста Рюмина о приключениях его с Бениовским.”

Северный Архив 2, no. 5 (март 1822): 375–394, no. 6 (март 1822): 447–462, no. 7 (апрель 1822): 3–20.

Сгибнев, Александр С. “Бунт Беньевского в Камчатке в 1771 г.” *Русская Старина* 15, no. 3 (март 1876): 526–547, no. 4 (апрель 1876): 757–769.

Siebold, Philipp. *Geschichte der Entdeckungen im Seegebiete von Japan, nebst Erklärung des Atlas von Land- und See-Karten vom Japanischen Reiche und dessen Neben- und Schutzländern*. Leyden: Siebold, 1852.

Sieroszewski, Andrzej. *Maurycy Beniowski w literackiej legendzie*. Warszawa: PIW, 1970.

Sieroszewski, Wacław. *Beniowski. Powieść historyczna*. Warszawa: Sic!, (1916)2013.

—. *Ocean. Powieść historyczna*. Warszawa: Biblioteka Polska, (1917)1924.

Смирнов, Николай Г. *Государство солнца*. Москва: Государственное издательство, 1928.

Sondermann, Frieder 「Benjowskys Japan-Aufzeichnungen und die Zeitgenössischen deutschen zeitschriftenrezensionen」 『東北大学教養部紀要』55号 (12月1990): 91-109.

Stefanow, Hippolitus. “Hippolitus Stepanows Reise aus Kamtschatka nach Makao und Batavia.” In *Begebenheiten und Reisen des Grafen Moritz August von Benjowski, von ihm selbst beschrieben. Aus dem Englischen übersetzt von J. D. Ebeling, Professor am Gymnasium in Hamburg, und P. C. Ebeling, Stadt und Landphysikus in Parchim. Mit des erstern Anmerkungen und Zusätzen, wie auch einem Auszuge aus Hippolitus Stefanows russisch geschriebenen Tagebuche über seine Reise von Kamtschatka nach Makao. Mit Landkarten und Kupfern. Mit allergnädigsten Freiheiten*. Translated and edited by Johann Dietrich Ebeling and Philipp Christian Ebeling, vol.2, 287-290. Hamburg: Benjamin Gottlieb Hoffmann, 1791.

Щепкин, Василий Владимирович. *Северный ветер: Россия и айны в Японии XVIII в.* Москва, Кругъ, 2017.

Teixeira, Manuel. *O Conde Benyowsky em Macau (em português e em inglês)*. Macau: Centro de Informação e Turismo, 1966.

Tricoire, Damien. “Enlightened Colonialism? French Assimilationism, Silencing, and Colonial Fantasy on Madagascar.” *Enlightened Colonialism: Civilization Narratives and Imperial Politics in the Age of Reason*. London: Palgrave Macmillan, 2017.

Tyson, Lois. *Critical theory today*. New York: Routledge, 2006.

Вахрин, Сергей Иванович. “Экипаж мятежного галюта.” *Вокруг Света*, no. 2 (1990).

Доступно ябрь 28, 2018.

www.vokrugsveta.ru/vs/article/2703/; no. 3 (1990). Доступно ябрь 28, 2018. www.vokrugsveta.ru/vs/article/2837/.

Voigt, Vilmos. “Maurice Benyovszky and his ‘Madagascar Protocolle’ (1772-1776).” *Hungarian Studies* 21 no. 1-2 (2007): 205-238.

Военский, Константин А. “1895. Русское посольство в Японию в начале XIX века.”

Русская старина 84, no. 7 (July 1895): 123-141.

Vulpus, Christian A. *Graf Benjowsky: ein Original Trauerspiel in fünf Aufzügen*. Leipzig: Johann Benjamin Georg Fleischer, 1792.

Wiadomości Warszawskie 64 (8 Sierpnia 1772). Warsaw University Digital Library. Accessed November 27, 2018, <http://ebuw.uw.edu.pl/dlibra/doccontent?id=136491>.

Whalley, George. *The Poetics of Aristotle*. Translated and edited by Samuel Henry Butcher. London: Macmillan, 1902.

Wróblewski, Jerzy and Anna Banach. *Zesłańcy*. Gdańsk: Krajowa Agencja Wydawnicza, 1989.

www.benyowsky.com. Accessed October 1, 2018. <http://www.benyowsky.com>.

Zdruzenie Morica Benovskeho. Accessed October 1, 2018. <http://morichenovsky.sk>.